

# 双河洞訪問記

後藤聡 (GOTO, Satoshi 東京スペレオクラブ所属 東京都在住)

錦戸ほのか (NISHIKIDO, Honoka うきぐもケイビングクラブ所属 福岡県在住)

## はじめに

2017年4月10日～25日に中国貴州省で開催された「2017年双河洞国家地质公园国际洞穴旅游科考节—Intentional cave tourism, Shuanghe Cave National geopark, 2017 Scientific expedition」に4月9日から16日まで参加してきた。これは後藤が双河洞の調査を含む貴州省の洞窟調査に20年以上にわたり関わり続けていたことと、調査隊の隊長らと10年以上の親交を持ち、また貴州省での洞窟調査の受け入れ組織の長であるLi Po氏らと30年の交流を持っていたことから招待されたものである。本稿では現地での活動や生活について報告したいと思う。



「2017年双河洞国家地质公园国际洞穴旅游科考节」の垂れ幕

## 双河洞調査について

「双河洞」の調査は1987年に始まり、最初の本格的な調査が日中貴州省洞窟調査隊(秋田大、早稲田大、東京農大、江戸川ケイビングクラブ)によって行われ、当時は総延長8km(複数の洞窟の合計;後にほとんどの洞窟は接続)として報告された。その後、フランス洞窟連盟と貴州洞窟協会とが2000年頃より共同で調査を続けている。現在の隊長はフランスのJean Bottazzi氏である。全長は当初の25kmから186.3km(2016年時点)まで延長された。これはアジア2位、中国1位で、ドロマイトの洞窟としては世界最長である。現在は200kmを越えている。

今回の洞窟調査にはフランス、ポルトガル、カナダ、スイス、日本、イタリア、ベルギー、中国の9カ国から50人以上のケイパーが参加した。活動目的は「双河洞」の測量と新洞調査である。活動班は大きく分けて測量班、探検班、記録班の3つで、我々は記録班として活動に参加した。日本からの参加は著者の他、九州大学探検部の木村颯が参加している。

記録班として撮影を行った5日間は、後藤が昨年2015年9月にスペインで行われたSpeleo Photo Meeting 2016で出会ったフランス人洞窟写真家のJeff Fabori氏とそのアシスタントのSebastianと行動を共にした。

以下に中国での記録を記す。9日から11日は錦戸、それ以降は後藤が執筆している。

## 4月9日(日): 福岡から貴州へ

この日は福岡空港から上海を経由して貴州へと向かった。共に後藤さんのアシスタントをすることになっている木村と福岡空港で合流したのだが、互いに海外経験が乏しいにもかかわらずほとんど乗り継ぎや空港について調べてきていなかった。

何とか上海空港にたどり着き、貴州行きの便を待っている最中、2人のフランス人男性に声を掛けられた。木村が背負っていたタックルバッグに反応して話しかけたらしい。この2人がこの後ほとんどの活動を共にする洞窟写真家のJeffとアシスタントのSebastianであった。

貴州に到着後、簡単な自己紹介と交流会を行い、就寝した。

## 4月10日(月): 現地宿所へ

朝起きてホテル近くの店で朝食を摂り、バスで調査の舞台となる温泉鎮へ向かった。移動にかかった時間は昼食休憩を入れておよそ6時間半である。移動中バスの中から見た山々の鋭さが印象的だった。どちらかというとなだらかな傾斜の山が多い日本では見られないような光景で、全く別の土地に来たのだなということを実感させられた。

現地について最初に思ったのは「宿所がきれい」である。普段の活動ではテントや車中泊、公民館で雑魚寝をしている私にとって、トイレ、シャワー、ベッド付きの部屋は今までにないほど豪華で快適なものであった。

荷物を部屋に置き、夕食を食べた後は後藤さんにストロボの使い方等を教えていただいてから、早めに就寝した。

## 4月11日(火): 式典参加と観光洞

朝食後宿所近くの会場に移動し、10時から11時まで式典に出席した。全て中国語であったため詳細は分からないが、「双河洞」のジオパークとしての発展について述べられていたように思う。式典が終わってから記録班のJeffと後藤さんが現地のTVの記者にインタビューを受けていた。

昼頃から観光洞に入り、数カ所で撮影を行った。ストロボの配置やポーズなど初めて経験することが数多くあった。特に難しかったのはモデルをしているときに動かないようにすることである。ストロボを自分の影に隠さなければならぬのだが、少しでも動いてしまうとライトが背後から漏れてしまう。同じ体勢を続けていたのと、変に緊張していたため筋肉痛になった。